感動を伝えられるように日々精進

都をどりで披露される優美な舞と、氷上でしなやかに躍動するフィギュアスケート。表現方法や身体の使い方は大きく異なる二つの芸術表現において、全身を使って表現することの楽しさや喜びには共通する部分もあるだろう。都をどりに向けて指導に当たる京舞井上流の井上安寿子さんと、アイスショーで全国を巡っているフィギュアスケーターの浅田真央さんにそれぞれの表現の魅力や、表現者として共通する思いなどを語ってもらった。（進行＝京都新聞社報道部・太田敦子）

対談内容はWEBでもご覧いただけます。上記QRコードから

井上 安寿子
Yasuko Inoue

いのうえ・やすこ　1988年生まれ。父は能楽観世流九世観世銕之丞、母は京舞井上流五世家元井上八千代（重要無形文化財保持者）。四世（曾祖母）と五世に師事。2015年から八坂女紅場学園舞踊科教師。井上流名取。

舞踊からインスピレーション　浅田

―浅田さんは2015年、京舞の稽古をされたそうですね。

浅田　安寿子さんに指導していただいたのですが、足が本当に辛かったのを覚えています。重心を常に低くして舞うのはフィギュアスケートも同じですが、舞踊をする上で必要な筋力のなさを痛感し、もっと鍛えないといけないなと感じましたね。また、指先まで神経をとがらせて舞うのにもとても苦労しました。稽古をご一緒いただいた芸妓の真生さんの舞はどこをとっても本当に美しい姿だったので、私もフィギュアスケーターとして、どのポジション（形）でも美しくありたいと思いました。

その年に初めて、都をどりや温習会のほか、真生さんの「蝶々夫人」の舞台を拝見しました。ちょうど私は休養していた時期で、自身のこれからを考えていた時だったこともあり、安寿子さんの教えや真生さんの舞踊を見て、私もこんな表現を氷上でできたらと感じて。その後、復帰した20 16年に「蝶々夫人」の曲で試合に出場し、引退後に開催した「サンクスツアー」でも滑らせていただきました。

―「蝶々夫人」は、安寿子さんの指導や真生さんの舞踊からインスピレーションを得られたんですね。浅田さんのアイスショー「BEYOND」は、安寿子さんもご覧になられたとか。

井上　長野での公演を拝見し、感動しました。スケーターの皆さんの息づかいやシュッと氷が削れる音がすぐそこで聞こえて、削れた氷が飛んでいくのも全部演出だと気づいて。衣装を次々と替え、いろんな役をされるのが本当にきれいで、最後は号泣してしまいました。

―抽象的な映像をスクリーンから流すなど、スケート単独での表現から一歩踏み込んだ舞台演出になっていました。

浅田　そうですね。サンクスツアーに続いて、引退後2回目となるアイスショーなので、舞台としてもっと進化させたいという思いから、リンクを360度囲むようにスクリーンを置いて、フィギュアスケートと映像の融合に挑戦しました。

演者全員に楽しんでほしい　井上

井上　でも、氷の上ですからね（笑）。私たちは地上でも「次はどこに行くのか？」みたいになってしまうのに、氷の上でピタッとけでではなく、やはり気持ち（心）が入っていないと良くありませんが、都をどりに初めて出る子は緊張で固まってしまいがちです。真央さんのBEYONDの公演のように、「演者全員が楽しむ」、そんなふうに都をどりの舞台を楽しんでほしいなと思いますね。とはいえ、私は都をどりではいつも指導する側なので、簡単に言いますが、仮に出る立場として考えると、そんなに簡単なことじゃないと思います。演出・出演両方こなされている真央さんは本当にすごいです。

京舞＋狂言合作「たぬき」　撮影：桂秀也

井上　フォーメーションもすごくきれいでした。

浅田　ありがとうございます。ただ、顔の角度や指の先までビシッとそろえる芸妓さん、舞妓さんたちに比べたら、私たちはまだまだです。

井上　その表現は、本当にすごいと思います。都をどりでも、特に総踊りはみなの動きがいかにそろっているかが見どころで、その出来栄えによってお客さまの引き込まれ方が違います。ただ単に形としてそろうだけでなく、やはり気持ち（心）が入っていないと良くありませんが、都をどりに初めて出る子は緊張で固まってしまいがちです。真央さんのBEYONDの公演のように、「演者全員が楽しむ」、そんなふうに都をどりの舞台を楽しんでほしいなと思いますね。とはいえ、私は都をどりではいつも指導する側なので、簡単に言いますが、仮に出る立場として考えると、そんなに簡単なことじゃないと思います。演出・出演両方こなされている真央さんは本当にすごいです。

―出演者であり、かつ演出者である浅田さんのなかで特に意識されていることはありますか。

浅田　難しさは双方ありますね。だからこそ、率先してみんなを引っ張って、お手本になるように、自分がしっかりしなきゃと思うことばかりです。稽古させていただいた京舞は、フィギュアスケートのように大きく表情に出したりしませんが、だからこそ内に秘めた思いの強さや美しさが、舞に表現されていると感じました。

井上　そう感じていただけたらうれしいです。私も舞うときは、たとえば、恋仲の人に裏切られた女性の舞では、そのさみしさや切ない思いをどう表現できるかと考えます。そして所作が自然に美しく見えるよう繰り返し稽古をするのですが、実は、京舞では鏡を見て稽古することはしないのです。

浅田　稽古場に鏡がないと気になっていたんです。

井上　自身を映す鏡ではなく、お師匠さん（家元）たちの舞姿をみて、それに近づく稽古をします。そうでないと、その人自身が持つ個性、感性がどうしても前に出てきます。だからこそ、まず基本姿勢、型をしっかり取り込むために「まねる」ということを第一とします。その後、熟練するにしたがって、いかに独自の表現を増やしていけるかですね。

―スケートではまねるよりも、鏡を見ながらのお稽古のほうが多いですか。

浅田　どちらもありです。子どものときはお姉さんたちのジャンプを見て飛んだり、リンクにある大きな鏡を見て自分でポジション（形）を確認したり。ただフィギュアスケートも、同じ振り付けで滑っても人によって印象が全く違います。安寿子さんがおっしゃるようにその人の体格や性格がフィギュアスケートでも出ますので、基本を糧に独自の表現を探していくというのは共通することだと思います。京舞の稽古では、細かい手や首の角度のつけ方が初めてのことだったので、見よう見まねで必死でした（笑）。

井上　真央さんが稽古された「祇園小唄」は、けっこう難しいんですよ。舞妓さん見習いの子に最初に仕込む曲ですが、みんなよく体の向きがわからなくなるんです。顔と体の向きが違うのに対応できなくて変な所作になったり。だんだんこなれてきますが、独自の癖が変につくことがよくあります。

―だから、お師匠さんの動きをよくまねてということなんですね。

型を取り込むために「まねる」　井上

地歌「鐘ヶ岬」　撮影：ハヤシフォート

井上　そうです。まず指導するのは「指先をそろえる」ことです。流儀によっては手を小さく見せるよう親指を手の内に入れますが、井上流は他の指に沿って一本の線に見えるよう反らします。身体も奇麗な線を描けるように、固くならず、女性らしく柔らかに。

―スケートの回転などの動きは、まねて体得できるものですか。

浅田　まね（型）を何百回も何千回も繰り返し、結果、いかに自分の形にするか、その練習の積み重ねですね。

井上　練習（稽古）しかないのは同じですね。私もこれでいいと思って、師匠に見せるとけんもほろろに叱られたり（笑）。どうしたらいいかと悩んで迷走することもしばしばです。けれど練習しなければ絶対に上達しませんから、やるしかありません。

浅田　そうですね。私も悩みながらも自分ができることをやるしかないと思ってやっています。それでお客さまから良い評価がいただけたら、良かったなと。毎公演確認して、いろんな人の意見を取り入れて、より良くできるものは修正するようにしています。

―安寿子さんがご覧になった1月の長野公演と、3月の大阪公演は違うのですか？

浅田　違いますね。毎回少しでも良いものをお見せしたいと思っていますので、少しずつ変えています。

―京舞ではどうでしょう。昔から受け継ぐ型など、その動きは変わらないと思うのですが。

井上　もちろん基本（型）は一緒です。⇖

祇園甲部歌舞練場新開場をお慶び申し上げます

京都駅ビル開発株式会社
JR西日本京都SC開発株式会社

西日本旅客鉄道株式会社　株式会社ジェイアール西日本デイリーサービスネット　西日本ジェイアールバス株式会社
株式会社JR西日本テクシア　株式会社JR西日本コミュニケーションズ　株式会社日本旅行　大鉄工業株式会社